ビーム型タンクコンテナ

A Beam Type Tankcontainer



(化)技術部 設計第2課 北 村 吉 Yoshio Kitamura

抈

A full frame beam type tank container has recently been developed and put into practical use. The aim of the development is to meet customers' demand for increasing the container volume beyond 21 m³ and for better protection of the tank shell from damage caused by a road accident or rough handling by a crane.

The new design of full-frame container is expected to have an advantage of better protection when compared with our previous design "container having no roof rail" proposed in 1986.

えがき

当社は1975年にタンクコンテナの製作を始めて以来タンをサドルを介してフレーム底部で支えるフルフレームのドル型を製作してきた。そして1986年には軽量化と大容用として、上部のルーフレールを取り省き(但し、ボトサイドレール付)、タンク重量を鏡部サポートリング及胴補強リングを介して前後のフレームで支え、タンクの部を強度メンバーとしたビーム型タンクコンテナを開発た。

ISO規格によって製作されるタンクコンテナにとってフレーム構造は、国際間の輸送において、ハンドリング必要というだけでなく、通常の海上輸送、道路輸送、鉄輸送及び取扱いにおける振動や衝撃等あらゆる外力からンクを守るということと、事故や手荒い取り扱いからもンクや保温を保護することの二つの重要な役目を果たしいる。従って、長手方向の上部、下部にフレームのあるルフレーム構造は特に危険物を運ぶタンクコンテナには求が多い。しかし一方では、コンテナの自重を軽くし、きるだけ積載重量を増やすため、上下長手方向フレーム省いたビームタイプも多く製作されている。

今回開発した20′×8′×8.6′の新ビーム型タンクコンテは、タンク重量を鏡部サポートリングを介して前後エンフレームで支える構造である。前回のビーム型で採用し、胴補強リングとエンドフレームとを結合する底部フレムは廃止し、ルーフレールとボトムサイドレール付きと

した,安全性重視で,大容量向きのフルフレームのビーム型タンクコンテナである。

1. ビーム型タンクコンテナの特徴

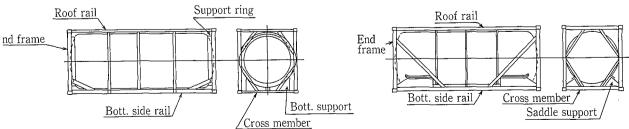
従来から製作してきたサドル型タンクコンテナ**第2図**と 今回開発したビーム型タンクコンテナ**第1図**の特徴比較を 次に示す。

1. 1 ビーム型の特徴

- (1) タンクは両鏡サポートリングを介してエンドフレーム全体で支える。
- (2) シャーシ荷重伝達はクロスメンバを介して, タンク 底部のサポートで受ける。
- (3) タンクとエンドフレームは溶接結合による一体型である。
- (4) ルーフレール, ボトムサイドレールを含むフルフレーム構造である。(ルーフレールなしでも製作可能)
- (5) 21 m³ を超える大容量のコンテナの製作が可能
- (6) 保温については、胴部と鏡部とはエンドフレームに接合し、鏡サポートリングで分離されている。鏡部保温はフレームとの一体形で、フラット面となる。

1. 2 サドル型の特徴

- (1) タンクは前後4箇所のサドルを介してボトムサイド レール, エンドフレーム, クロスメンバの底部フレー ムのみで支える。
- (2) シャーシ荷重伝達はクロスメンバを介してサドル端 部で受ける。



1図 新ビーム型タンクコンテナ

ig. 1 New beam type container

第2図 サドル型タンクコンテナ

Fig. 2 Saddle type container

第 1 表 ビーム型コンテナ供試体の仕様

Table 1 Specifications of beam type container specimen

	J [
ISO class	20'×8'×8'6"(1CC)
IMO type	Type 2
Nominal capacity	21 000 ℓt
Tank inside diameter	2 200 mm
Tank overall length	5 824 mm
Shell thickness	$3.2\mathrm{mm}$
Head thickness	5.0 mm
Tank material	SUS 316
M. A. W. P.	1.78 kgf/cm ²
Design pressure	2.46 kgf/cm ²
Max. gross mass	24 000 kg
Tare weight	3 520 kg
Max. payload	20 480 kg

- (3) タンクとサドルはボルトによる 結合
- (4) フレーム構造はフルフレーム型。 ルーフレール,ボトムサイドレー ル及び斜めサイドフレーム付きの ため安全性が高い。
- (5) 保温構造は胴部及び鏡部一体型でフレームから独立

1.3 ビーム型コンテナの仕様

国際間で流通しているタンクコンテナは,20 ft. の長さのものが圧倒的に多く,容量では23 m³ 以上,総重量は30.48 ton が主流である。国内では危険物輸送における規制があり,消防法では容量が20 m³ と制限されているが,国際タンクコンテナについては20 m³ 以上の容量が認められている。また,道路法では,最大積載量(コンテナ自重+積載物)が24 ton の規制がある。国内ユーザも国際専用タンクコンテナとしては容量の大きいものを望んでおり,また法規制についても国際情勢にあわせ,国内はもちろん海外からも規制の緩和が強く望まれている。

今回の開発はユーザニーズと将来の 規制緩和を前提に,最大容量 24 m³,

総重量は 30.48 ton を目標とした。 ただし,実際の試作にあたっては,現在の標準コンテナにあわせ,容量を $21~\mathrm{m}^3$,最大総重量は 24 ton(フレーム構造は 30.48 ton)用とした。供試タンクの基本仕様は第1 表に示す。

告[[//]	CAL III	
製作用	FE	大容量

製作可能最大重量

ビーム型

24 m³

30.48 ton

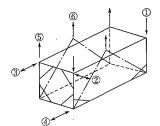
サドル型 21 m³

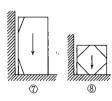
24.0 ton

2. 荷重テスト (静的,動的荷重)によるフレーム強度確認

2. 1 静的荷重試験

従来のサドル型、ビーム型同様今回の新ビーム型タンクコンテナもISO、CSC条約(安全なコンテナに関する国際条約)及びその他規則に定められている荷重試験を行





- ① Stacking test $(1.8 \text{ R} \times 5/4)$ (6 stacks) = 54000 kg
- ② Lateral racking test
- 15 240 kg
- 3 Longitudinal racking test
- $7\,620\,\mathrm{kg}$
- 4 Longitudinal restraint test (2 R)
- $= 48\,000\,\mathrm{kg}$ $= 48\,000\,\mathrm{kg}$
- 5 Top lift test (2 R)6 Bottom lift test (2 R)
- = 48 000 kg
- 7 Londituginal internal restraint (R)
- $= 24\,000\,\mathrm{kg}$
- $= 24\,000\,\mathrm{kg}$
- R: Maximum gross mass = 24 000 kg

 $= 24\,000\,\mathrm{km}$

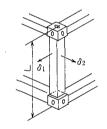
第3図 荷重試験概略図

Fig. 3 Outline of load test

第2表 積重ね試験部材変形

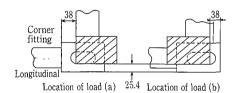
Table 2 Distortion of members in stacking test

	Loc	ation of	load	Loc	ation of	load
Load	a .				b	
	δ_1	δ_2	ΔL	δ_1	δ_2	ΔL
54 000 0	$\begin{vmatrix} 0 \\ +0.1 \\ -0.4 \end{vmatrix}$	0 +1.8 0	$\begin{bmatrix} 0 \\ -2.0 \\ 0 \end{bmatrix}$	$\begin{vmatrix} 0 \\ +0.1 \\ -0.4 \end{vmatrix}$	$\begin{vmatrix} 0 \\ +1.6 \\ 0 \end{vmatrix}$	$\begin{bmatrix} 0\\-2.0\\0 \end{bmatrix}$



	Loc	ation of	load	Loc	ation of	load
Load	,	С	•		d	
	δ_1	δ_2	δ_2 Δ L		δ_2	ΔL
54 000 0	$ \begin{array}{c c} 0 \\ +0.2 \\ -0.4 \end{array} $	$\begin{vmatrix} 0 \\ +2.0 \\ 0 \end{vmatrix}$	$\begin{bmatrix} 0 \\ -2.0 \\ 0 \end{bmatrix}$	$\begin{vmatrix} 0 \\ +0.3 \\ -0.4 \end{vmatrix}$	$\begin{vmatrix} 0 & . \\ +1.8 & 0 \end{vmatrix}$	$\begin{bmatrix} 0 \\ -2.0 \\ 0 \end{bmatrix}$

Residual distortion $\leq 3 \, \text{mm}$







Location of load (c)

Location of load (d)

い合格した。荷重試験の種類と荷重の大きさを**第3**図に示す。試験荷重は総重量24tonが基準になっている。また,各試験荷重での歪みを測定し,強度の確認を行った。

1) 積重ね試験 (Stacking test)

コンテナがコンテナ船に積み込まれる場合,一番下のコンテナは上に積まれた全コンテナの重量を直接受けることになる。従って,ISO及びCSCでは,通常6段積として,上5段分の重量と船体の動揺によって生ずる加速度分を加えて試験を行うことが規定されている。また,積み荷は少しずつずれて積まれている可能性があるため,コーナポストに荷重をかけるときは,長手方向に $38\,\mathrm{mm}$,横方向に $25.4\,\mathrm{mm}$,ずらして荷重をかけることになっている。それぞれ位置をずらしての荷重試験結果を第2表に示す。

2)横ラッキング試験(Lateral racking test) コンテナが甲板上に2段あるいは3段と段積み 5れたコンテナは船のローリングや荒天時の転倒 5止のため固縛されるので,下段のコンテナは横 7向に荷重を受ける。その荷重を考慮した試験を ううため,下部隅金具を上下,左右前後に動かな 、よう固定し,上部隅金具に横方向水平に圧縮と 1張荷重を加える。試験結果については第3表に ます。

(Longitudinal racking test)

横ラッキングと同様、船のピッチング時にコン うナの長手方向の力が前後エンドフレームに加わ うため、この荷重を考慮した試験を行う。下部隅 ≥具を上下左右前後に動かないように固定し、上 β隅金具に長手方向水平に荷重をかける。試験結 ≷は第4表に示す。

- 1)長手緊締試験(Longitudinal restraint test) コンテナをトラックや鉄道で輸送する場合,急 6進,急停止によりコンテナ下部隅金具緊締部に 庁撃を受けるため,その荷重を考慮した試験を行 う。コンテナ下部隅金具前後のどちらか一端を固 きし,他端の隅金具に圧縮,引張の水平荷重をか トる。試験結果については第5表に示す。
- う) 上部吊上げ、下部吊上げ(Top and bottom lift test)

この試験はコンテナを吊り上げた時に隅金具が はずれたり、床フレームが曲がったり、落下した しないよう試験を行う。また、吊り上げ時の加 を度を考慮した試験を行う。試験結果については **36表**に示す。

う)長手慣性試験・横慣性試験 (Internal restraint test)

この試験は、長手方向、横方向に加速度が働い 二時、内容物の慣性が本体に及ぼす影響を考慮し 三試験を行う。試験結果については第7、8表に ミす。

. 2 動的荷重試験 (Dynamic impact test) [CTC (Canadian Transport Comission) 衝 窒試験]

この規定はカナダでのあらゆる輸送に関する規 きで、コンテナを鉄道輸送する場合もこの規定に らなければならない。この規定の衝撃試験は、 1ンテナを鉄道輸送する場合の発進、停止の際に 己こる衝撃に耐えるかどうかを判定する試験であ う。

CTCの試験方法は、バッファー付きの台車を う両連結で固定車として設置し、タンクコンテナ 全積載した台車を駆動車で押して行き、規定のス ピード (4 mile/h, 6 mile/h, 8 mile/h) で離し、 司定車に衝突させる。衝突後コンテナに歪みや損 易がないこと、フレーム上面隅金具の両対角に測った寸法の変化が $3 \, \mathrm{mm}$ 以内であることが合格条 부である。

当社では、5両の台車の代わりに、CTCの許丁を得て、鋼材を積んだ1台の固定車にコンテナ 貴載台車を規定のスピードで衝突させる方法を行っている。今回の試験結果でも、コンテナの強度 こは 問題ないことが 確認され、 合格の 判定を得 こ。

第 3 表 横ラッキング試験部材変形

Table 3 Distortion of members in lateral racking test

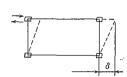


•	· ·		Push			Pull	
	Load	⊿L1	⊿L2	$\Delta L1 + L2$	δ_1	δ_2	$\Delta L1 + L2$
•	0 15 240 0	$\begin{vmatrix} 0 \\ +4.0 \\ 0 \end{vmatrix}$	$\begin{bmatrix} 0 \\ -4.0 \\ 0 \end{bmatrix}$	8.0	$\begin{bmatrix} 0 \\ -4.0 \\ 0 \end{bmatrix}$	$^{0}_{+5.0}$	9.0

Diagonal distortion ≤ 60 mm

第 4 表 長手ラッキング試験部材変形

Table 4 Distortion of members in longitudinal racking test

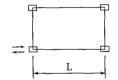


Load	Push	Pull
(kg)	δ	δ
7 620 0	0 4 0	0 7 0

Distortion $\leq 25.4 \, \text{mm}$

第 5 表 長手緊締試驗部材変形

Table 5 Distortion of members in longitudinal restraint test

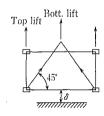


Load	Push	Pull
(kg)	. L	L
0 48 000	$\begin{array}{c} 0 \\ -2.0 \end{array}$	$^{0}_{+2.0}$
0	-2.0	0

Residual distortion ≤ 2.0 mm

第 6 表 上部,下部吊上試験部材変形

Table 6 Distortion of members in top lift test and bottom lift test

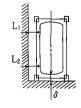


Load	Top lift	Bott, lįft
(kg)	δ	δ
0	0	0
48 000	+0.5	+0.5

Redidual distortion ≤ 3.0 mm

第 7 表 長手慣性試験部材変形

Table 7 Distortion of members in longitudinal restraint



Load		I	.1	I	_2
(kg)	δ	Right	Left	Right	Left
24 000 0	$\begin{vmatrix} 0 \\ +4.2 \\ +0.1 \end{vmatrix}$	+1.0	0 0 0	$\begin{vmatrix} 0 \\ +1 \\ 0 \end{vmatrix}$	$\begin{vmatrix} 0 \\ +0.5 \\ 0 \end{vmatrix}$

 $L_1, L_2 \leq 1.5 \,\mathrm{mm}$ $\delta \leq 42 \,\mathrm{mm}$

第 8 表 横慣性試験部材変形

Table 8 Distortion of members in longitudinal restraint



Load	Load		1	L2		
(kg)	δ	Right	Left	Right	Left	
0 24 000 0	$\begin{vmatrix} 0 \\ +1.8 \\ 0 \end{vmatrix}$	0 0 0	0 0 0	0 0	0 0 0	

 $L_1, L_2 \leq 1.5 \,\text{mm}$ $\delta \leq 8 \,\text{mm}$

Table 9 Maximum stress under load test

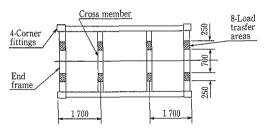
Table 9 Maximum stress under				Dimension: kgf/mm²
Load tests	Max. stress	All. stress	Member	Location
1. Stacking (Case 1)	19.7	31, 8	Corner post	
2. Lateral racking (Comp.)	21.3	23.5	Top end rail	
3. Lateral racking (Tens.)	24.4	42.0	Head	(12, 10)
4. Longi. racking (Comp.)	32.6	42.0	Head	3133
(without/roof rail) 5. Longi. racking (Tens.)	29.1	42.0	Head	6,7
(without/roof rail) 6. Longi. racking (Comp.) (with roof rail)	12.1	16.5	Roof rail	
7. Longi. racking (Tens.)	16.9	36.0	Roof rail	
(with roof rail) 8. Longi. restraint (Comp.)	9.3	22.5	Bott. end rail	8, 9, 11
9. Longi. restraint (Tens.)	10.1	36.0	Bott. end rail	/
10. Top lift	2.9	36.0	Support ring	10
11. Bottom lift	3.5	22.5	Bott. siderail	
12. Inter. restraint (Longi)	11.5	42, 0	Head	
13. Inter. restraint (Lateral)	9.1	42.0	Support ring	
14. Load for transfer area	23.8	36.0	Cross meber	14

1. Allowable stress

 $3 \cdot S_m = 3 \times 14.0 = 42.0 \text{ kg/mm}^2$

 $1.5 \sigma_y = 1.5 \times 24 = 36.0 \text{ kg/mm}^2$

f_c=Allowable buckling stress:= $\frac{1.5\{1-0.4(\lambda/\Delta)^2\}F}{}$



第4図 コンテナサポート位置

Fig. 4 Location of support

静的荷重試験の歪測定

2.1項の1)から6)までの荷重試験での部材変形確認 と同時に主要部材の歪測定を行い, 応力換算し強度の確認 を行った。第9表は各試験における応力の最大値であり, 全て許容応力以下であった。

FEM解析による強度の確認

コンテナの強度の確認は、法的にはCSCの静的荷重試 験あるいは貨車による衝撃試験を行い,規定の残留歪以下 であることが条件になる。しかし、プロトタイプの製作の 時には、特に計算方法は指定されないが、静荷重試験及び 動荷重に対しての強度を確認した計算書の提出を求められ る場合がある。

次の応力解析はタンクコンテナにかかる動荷重の検討を 行ったものである。

4. 1 2 Gの自重を負荷した場合

IMDG CODE など各規定に定められた動荷重は, 垂直 下向きで2Gの加速度とされている。このことから、この 2Gを荷重条件として解析を行う。この荷重を第4図に示 すように、隅金具4箇所で支える場合(CASE-1)とクロ

第 10 表 2 Gの自重負荷応力解析結果

Table 10 Stress analysis under dynamic load of 2G

CASE	Support	Head SI	Shell SI	3•Sm	Frame SG	1.5 σ _y
1-1	Corner fitting	22.5	5.00	42.0	8.20	36.0
1-2	Cross member End frame	11.7	8.68	42.0	10.3	36.0

Head thickness: 5.0 mm, shell thickness: 3.2 mm

3.Sm: Allowable stress of shell (SUS316)

 $3 \times 14.0 = 42.0 \text{ kgf/mm}^2$

1.5 σ_y : Allowable stress of frame

 $1.5 \times 24.0 = 36.0 \, \text{kgf/mm}^2$

スメンバ, エンドフレーム 8点 (シャーシ荷重伝達面) で 支える場合(CASE-2)との二通りのケースで各部材の応 力解析,疲労解析を行った。

1) 応力解析

最大応力の発生する箇所は、 鏡ではサポートリング取付 部、本体胴は底サポート取付部、フレームではクロスメン バのボトムサイドレールとの取付部に発生している。

解析の結果, その発生応力強さは, 第10表に示すように 許容応力強さ3·Sm以下である。また、フレームに発生す る応力SGも,全面降伏応力 $1.5\sigma_y$ 以下である。

2)疲労解析

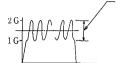
疲労解析は自重1Gは一定とし、運搬中の振動による応 力振幅は1G分とした。従って、応力振幅(Sn)は1)の 応力解析で求められたSIの1/2とする。フレームは最大 主応力であり、最小主応力は0としてSG=SIとする。

JIS8250(第4図12.1,第4図12.2)の材料設計疲労 曲線によれば疲労繰り返し回数の最高値は106までであり, タンクコンテナにおいてはこの 106 を許容繰り返し回数と しており、解析結果では、第11表に示すように、いずれの 部位においても許容繰り返し回数以上である。

第11表 2 Gの自重負荷における疲労解析

Table 11 Fatigue analysis under dynamic load of 2G

CASE	Evaluated part	Sn	α	r	r•Salt	N	n				
1-1	Head Shell Frame	11.3 2.50 4.14	2.75 2.75 2.75	0.95 0.95 1.08	14.8 3.27 6.15	$ \stackrel{>10^{7}}{>_{10^{7}}^{10^{7}}} $	$\begin{array}{ c c }\hline 1\times10^{6} \\ 1\times10^{6} \\ 1\times10^{6} \\ \end{array}$				
1–2	Head Shell Frame	5.85 4.34 5.15	2.75 2.75 2.75	0.95 0.95 1.08	7.64 5.67 7.65	$\begin{array}{c} > 10^{7} \\ > 10^{7} \\ > 10^{7} \end{array}$	$\begin{array}{ c c }\hline 1\times10^6\\ 1\times10^6\\ 1\times10^6\\ \end{array}$				



Stress amplitude for 1G

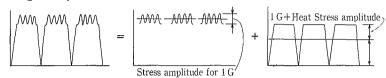
- α : Fatigue strength reduction factor
- r: Modular ratio

r•Salt: Stress amplitude (Sn•α•r/2)

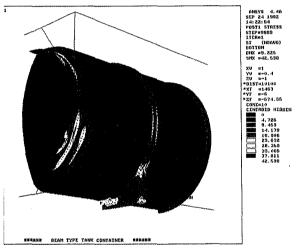
N: Allowable number of repeat

第12 表 自重+熱荷重の疲労解析結果

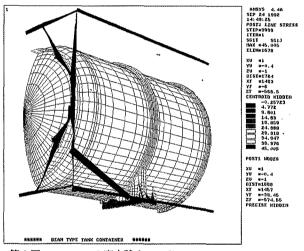
Table 12 Fatigue analysis



CASE	Evaluated part	Sn	α	r	Ke	r•Salt	N	n	Ui	U
1-1 2-1	Head	11.3 42.5	$2.75 \\ 2.75$	0.95 0.95	1.04	14.8 57.7	$8 \times 10^{6} \\ 2500$	$\begin{array}{c c} 1\times10^6\\200\end{array}$	0.13 0.08	0.21
1-1 2-1	Shell	$2.50 \\ 23.7$	2.75 2.75	0.95 0.95	_	3. 27 31. 0	$>10^{7}$ $40\ 000$	$1 \times 10^{6} \\ 200$	0.1 0.01	0.11
1-1 2-1	Frame	4.14 45.0	2.75 2.75	1.08 1.08	1.19	6.15 79.5	$>10^{7}$ 400	$\begin{array}{c} 1\times10^6\\200\end{array}$	0.1 0.50	0.6



第5図 胴部の応力強さコンタ Fig. 5 Shell stress contour



第6図 フレームの応力強さコンタ Fig. 6 Frame stress contour

4. 2 1 Gの自重と熱荷重及び1 G分の振動を負荷した場合

1) 応力解析

熱荷重としては、本体 $100\,^{\circ}$ C とし、フレームは $0\,^{\circ}$ C の温度条件として解析を行ったものである。

解析結果では、本体に発生する応力強さは許容応力強さの3·Smを超える。また、フレームに発生する応力SGも全面降伏応力 $1.5\,\sigma_y$ を超える。従って、簡易弾塑性解析を次項で行う(J I S8250では、簡易弾塑性解析により疲労解析が満足できるものであれば $3\cdot$ Smを超えても良いことになっている。)第5 図は胴部に発生する応力分布のコンタで第6 図はフレームに発生する応力分布のコンタである。2) 疲労解析

解析は二つの有意な応力サイクル, すなわち4.1の2) で評価した運搬中の振動及び熱応力発生時の自重と熱が負 荷されているため、この二つの応力サイクルで累積損傷を 評価する。

この損傷評価としては、予想応力振幅における破壊までの繰り返し回数をNとし、予想繰り返し回数をnとすると、n/Nで表される使用係数Uiの累積 $\Sigma Ui=U$ が1以下であることが必要である。解析の結果累積使用係数Uは、第12表に示すようにいずれも1.0以下である。

むすひ

本来ビーム型コンテナの開発は、ビーム型にすることによって、コンテナ自体の自重を軽くし、積載重量を増やすことによって、輸送効率を高めることにあるが、反面世の中のニーズはより安全性を考えて、フレーム構造はフルフレームにという要求が強いため、メーカーとしてはやはり安全第一に考慮すると同時に、全体的にはできるだけ軽量化をめざさなければならないと考えている。